

無常觀の段は漢文的な書きぶりがしてあると言えるのではないかと思われる。

第二章では、全段を通して見た場合、隱遁文学である徒然草に当然多かるべき老荘の引用が少なく、反対に儒家の引用が圧倒的多数を占めているという、矛盾について考えた。が、これは数の上だけのことであり、内容的にはむしろ老荘思想の方がより強い影響力を持っていると思われる。即ち、矛盾は矛盾として残るのではなく、徒然草は隱遁文学としての要素をも十分備えていると言いうことができる。

注

(注1) 「徒然草に投影した海外文学」福田襄之介 「国文学」第六卷第三号

## 解釈と鑑賞

### 狭衣物語解釈

(14)

大殿には、<sup>おほいめ</sup>「中将の君はこよひは出で給ふまじきにや」など、尋ねさせ給ふほどに、藏人所の方に人々こゑ高く

〔漢籍引用より見た徒然草の一考察〕古澤未知男

(注2) 「徒然草」日本古典全書、解説

(注3) 「徒然草全注釈下」、解説

(注4) 「方丈記・徒然草」日本古典文学大系、解説

(注5) 具体例については付載の資料編に詳しく挙げたが、本稿ではいっさい省略する。

(注6) (注4)に同じ

(注7) 「兼好の遁世生活とつれづれ草の成立」『方丈記』

(注8) 「徒然草」日本文学研究資料叢書 有精堂

(注9) 「徒然草の本質」『国文学』第十卷 第九号

(注10) 「無常觀の形式——徒然草における」『解釈と鑑賞』第四二卷第五号

〔漢籍引用より見た徒然草の一考察〕

本 田 義 彦

もの言ふを、「何事ならむ」と聞かせ給ふに、伊豫守なにかしの朝臣参りて、「うちにかうかうの事なむ候ふな

「と申すを、聞き給ふ御心地ども、いかばかりかはあ  
りけむ。さらにうつつの事とも思されねば、「居給へり  
つらむ跡をだに今一度見む」と宣ふ事より外に物も覚え  
給はぬを見給ふに、母宮はただ御衣引きかづきてぞ臥し  
給へる。世はいかになりぬるぞと見ゆるまで、殿の内騒  
ぎたり。道のほど思し続けるもいみじうゆゆしきに、御  
車の内より流れ出づる御涙、千曲の川渡り給ひけるにや  
と見えたり。道のほど例よりも遠う思されて、陣のほど  
人に引かれ入り給ふに、九重の内（まごのに物騒がしげもなし。  
火焼屋（やま）の火ども常よりは明うて、ここかしこのはざま、  
塀のつらづらなどに言ふ声々、「ただこの事なるべし」  
と聞き給ふに、「さてまことに空に昇り給ひぬるにや。  
いかに言ふぞ」と思すに、心地もいとど惑ひて倒れ給ひ  
ぬべし。「殿参らせ給ふ」と人々立ちさわぐを、中将  
「この事によりてならむかし。いかばかり御心地惑はし  
給ひつらむ」と思すもいとほしうて、殿上の口にさし出  
で給へるを、「おはしましけり」とうち見つけ給へるぞ、  
なかなかいみじきや。

(口訳)

堀川の大殿（おほむぎ）におかせられては、「中将の君（狭衣）は今  
夜は宮中から退出なさらないのであろうか」など、女房た  
ちにお尋ねなさっている間に、蔵人所の方で人々が声高く  
何か言っているのを、「何事なのだろう」と聞いていらっ  
しゃると、伊豫守なにかしの朝臣がやって来て、「宮中で  
これこれのことがあったそうです」と申すのを、お聞きに  
なるご両親のお気持どもは、どんなであつただろうか。全  
く現実のこととお思ひに成れないので、「その昇天の時  
坐つて居られたあととなりともせめて今一度見たい」とおっ  
しやる事より外に正気もないようであつた。堀川の大  
殿をご覧なされて、母宮はただお着物をひきかぶつて寝て  
いらつしやる。世の中はどうなつてしまふのかと思われ  
るまで、堀川の大殿のご殿の内は大騒ぎをしている。宮中へ  
の道すがら、中将の君のことばかり思い続けなされるにつけ  
てもひどく不吉なその上に、心配の余り御車の内から流れ  
出る御涙は、千曲の川をお渡りになつたのではあるまいか  
と思われた。宮中への道のりが、いつもより速く思われて、  
陣のあたりを人に手をひかれて入りなされるのに、宮中のな  
かに物騒がしい様子もない。火焼屋の火どもはいつともより  
は明るくて、ここかしこの建物と建物との間や、塀の前な  
どで話している声々は、「ただこの事であるう」と聞き給  
うにつけ、「さてほんとうに空に昇りなされたのだろうか。  
何と言っているのか」とお思ひになるのに、心地もいよいよ  
よ乱れて倒れてしまふそつであつた。堀川の大殿  
がおいでになつた」と、人々が立ち騒ぐのを聞きになつ

て、中将の君は、「この事によっておいでになったのであろうよ。どれほどお心も乱れなされたことであろう」と思われるにつけても父大殿がお気の毒で、殿上の間の入口に出ておいでになったのを、「昇天せずに無事にいてください」と見つけなされたのは、かえってひどく胸をしめつけられる思いをされることであつた。

〔註記〕

○大殿 「おほいどの」又は「おとど」とよむ。蓮空本・九条家旧蔵本には「おほい殿」と仮名書になつてゐるので、一応「おほいどの」とよんでおく。大きな御殿の意から、そこに住む人の意となる。又転じて大臣家の称、ここでは中将の君即ち狭衣の父、堀川の大殿のこと。

○大殿には 「には」は「大殿におかせられては」と、威厳をこめた強めた言い方。朝日新聞社刊の日本古典全書本の頭註では「堀川大臣の邸宅では」と解している。邸宅ととれば、次に主語となる人物を補わねばならないので如何であらうか。一応「大殿」を邸宅ととらないで人物ととつておいた。

○中将の君 堀川の大殿の子。狭衣のこと。

○尋ねさせ給ふ 日本文学全集本の狭衣物語（中村真一郎訳）の口訳では「使を出してきかせる間に」とある。これだと宮中に使いを出すことになる。岩波書店刊の日本古典文学大系本の傍註には「女房に」とある。女

るが、「それがし」単独で用いられた例は一例もない。

房では事情を知らないかも知れないが、そんな理屈ぬきに近くの者に聞くことはよくある。宮中まで使を出すのも少し大げさすぎるので「女房に」とつておいた。

○蔵人所 ここは堀川の大殿の邸内の蔵人の詰める建物。「蔵人」は、もともと宮中で天皇側近の御用を勤める役であるが、さらに摂政・関白家の家政を掌るものにもいう。別当一人で、職事が四十三人。別当を、また蔵人所の家司ともいつた。「今鏡」の「伏見の雪のあした」の巻に、「上達部、殿上人、蔵人所の家司、職事、御隨身など、さまざまに参りこみたりけるに」などの用例がある。

○聞かせ給ふ 「せ」は使役とも尊敬ともとれる。が一応尊敬として訳しておいた。

○伊豫守なにがしの朝臣 堀川殿の家司であらう。「なにがし」は、本当は実名を言つたのであるが、このように書くのが慣例であつた。岩波大系本では、「伊豫の守それがし」とある。「朝臣」があればかしまつた言い方で、前の「大殿には」と威厳をこめた言い方とも相まって、緊張した気分がうかがわれる。

○なにがし 「なにがし」が内閣文庫本だけは「それがし」となつてゐる。用例をみると、内閣文庫本では「なにがし」が一四例で「それがし」は一六例と「それがし」の方が多いけれど、流布本である古活字本系統では「それがし」は、「なにがしそれがし」として一例、「それがしかれがし」として二例、合計三例あ

配の余り「御衣引きかづきてぞ臥し給へる」ともある。

るが、「それがし」単独で用いられた例は一例もない。ちなみに源氏物語の場合は「なにがし」は五八例もあるが、「それがし」は一例もない。以上から考えると、「それがし」は「なにがし」よりおそく発生した語のようでもあるし、ここは特に単独で用いられた場合があるので、古活字本系統の「なにがし」の方がよくはないだろうか。

○ かりかうの事 宮中での音楽の遊びの際、狭衣の中將の笛の音にめでて、天稚御子が狭衣を天上にお誘いになり、狭衣が天上に昇ってしまったという事。実際は、狭衣はご両親のおなげきを思って、天稚御子のお誘いを断わられたのであるが、噂さは狭衣昇天となってしまうのであろう。伊豫守は噂さのままに狭衣昇天と堀川の大殿に報告したようである。ということは、後文の堀川の大殿のことばに「居給へりつらむ跡をだに、今一度見む」とか、「さてまことに空に昇り給ひぬるにや」とあるによつて分る。なお岩波大系本の頭註に「内裏でしかじかの事件がございましたらうです。ですから狭衣様の帰邸は遅れなされるでしょう。」とあるが、伊豫守は「狭衣昇天」と報告したのであるから、狭衣の「帰邸が遅れる」とあるのは当らない。

○ 候ふなる 「なる」は伝聞・推定の助動詞。

○ 御心地ども 岩波大系本では、すぐ前文の「聞かせ給ひて」の傍註に「堀は」とあるところからみると「御心地」も堀川の大殿の御心地となるが、ここは「ども」という複数を示す接尾語もあるし、すぐ後に母宮が心

配の余り「御衣引きかづきてぞ臥し給へる」ともあるので、ご両親の「御心地ども」ととつた。

○ 居給へりつらむ跡をだに今一度見む この語から、狭衣はもう昇天してしまつていられると、堀川の大殿は思いこんでいられることが分る。前述したように、伊豫守は「狭衣昇天」と報告したのであろう。「見む」の「む」は、一人称の動作について意志・希望を示す助動詞、口訳では希望に訳しておいた。

○ 世はいかになりぬるぞ 末法思想によるもの。ついに世は滅びてしまうのか、という意。末法思想というのは、釈迦入滅後最初の千年間を正法時といい、教が正しく行われ修行の結果悟が開かれる。次の千年間を像法時といい、教も修行も行われるが形ばかりで悟は開かれぬ。次の一万年間が末法時で、教はいたすらに存するばかりで修行する人もなく悟は開かれず、仏教は全く衰退し、天災地変、疫病流行し、世は終りとなるという思想である。釈迦の入滅は紀元前九四九年であるので、二千一年目の末法時に入る年は、冷泉天皇の永承七年（一〇五二）にあたる。狭衣物語の成立は、ほぼ延久・承保年間といわれているので（岩波大系本狭衣物語の解説による）、一〇六九年から一〇七七年の間ということになる。即ちこの時代は一〇五二年の末法時にはいっただばかりで、十年か二十年しかたつていないことになる。

○ 千曲の川 「ちくまの川」は千曲川のことであろうか。千曲川は長野県（信濃国）北東部を流れる川で、関東

山地（甲武信岳）に源を発し佐久平・小諸などを流れて新潟県に入り、信濃川となって日本海に注ぐ。千曲川は歌枕としても有名で、更級郡上山田町上山田温泉千曲川河畔には万葉歌碑「信濃なるちくまの川のさざれしもきみしふみてば玉とひろはむ」が建つてゐる。

ところで、千曲川は徒歩渡りしたものであろうが、この場合にふさわしい歌も見当らず、出典未詳。なおこの川の名前は内閣文庫本には出てこない。

○陣 警固の者の詰所のことであるが、ここは建春門の左衛門府の陣屋のことであろう。

○人にひかれて入り給ふに 気も顛倒していて足もともおぼつかないのであろうか、人の手を借りてゆかれるのである。

○さはがしげもなし 蓮空本は「さはがしきげもなし」とあつて「き」が異本では「く」となつてゐる由を書き入れ、また「けもなし」が見せ消ちとなつてゐる。

同系統であるが九条家旧蔵本の方は「さはがしく」とあつて、「けもなし」はない。「けもなし」はある方がよゝ。

○火焼屋 夜警のために衛士が篝火をたいて詰めてゐる番所。

○あかくて 内閣文庫本、蓮空本、九条家旧蔵本は共に「あかく見えわたりて」とあり、特に蓮空本と九条家旧蔵本とは「み」の右側に「もい」とあり、異本では「あかくもえわたりて」となつてゐる由である。

○はざま 建物と建物との間。

○ただこの事なるべし 「この事」とは天稚御子が狭衣を迎えにきて、狭衣が昇天したということ。

○いとど 宮中に来て人々の言う声を聞く前にも心乱れておられたが、宮中でその声を聞くとなお一層の意。

○この事によりてならむかし 「この事」とは、前述の「この事」と同じく、狭衣昇天のこと。

○いとほしうて 「ほ」の字は、古活字本では「を」となり、鎌倉市立図書館本・蓮空本・九条家旧蔵本では

「お」とあるが、歴史的仮名遣いに従つて、「ほ」と訂正。内閣文庫本は「いみじければ」とある。

○殿上の口 清涼殿の南側にある。

○なかなか 無事であるのを知つて安心すべき筈なのに、今まで余りに心配が強かつたため、ほっとしたとたにかえつてひどく胸がしめつけられたこと。

○古写本の校異について かかげた五本は次の三系統に分類できる。

① 古活字本、鎌倉市図書館蔵本

② 内閣文庫蔵本

③ 蓮空本、九条家旧蔵本

右のうち、流布本といわれる古活字本・鎌倉市図書館蔵本の本文が一番簡潔で、内閣文庫蔵本が一番詳細であり、蓮空本・九条家旧蔵本は古活字本に近いが、ところどころ内閣文庫蔵本で補充したと思われる部分がある。狭衣物語の本文は異同がはげしく、何れの本文が原本に近いか一概には言われない。

鎌—鎌倉市図書館蔵本（古典研究会刊 上 四六頁 一〇行）  
 古—古活字本（朝日新聞社刊 日本古典全書本 上 二〇六頁 三行）〔底本〕  
 内—内閣文庫蔵本（岩波書店刊 日本古典文学大系本 四八頁 一行）  
 蓮—蓮空本（古典文庫本 第一冊 三三頁 一行）  
 九—九条家旧蔵本（未刊国文資料 上 二四頁 八行）

註—底本と同じという  
 こと  
 ××その文字がないと  
 いうこと

鎌	—	×	×	—	え	—	×	—	×	—	こ
古	大	×	×	殿には中将の君は今宵は	×	出で給ふまじきにやなど尋ねさせ	×	給ふ程に蔵人所の方に人々こゑ	×	×	×
内	×	×	×		×	×	×	×	×	×	×
蓮	おほい	—	—		×	—	—	きこえ	—	×	×
九	おほい	—	—		×	—	—	きこえ	—	×	×

鎌	ゑ	—	×	—	×	—	与	—	×	—	
古	×	たかくもの	×	いふを何事ならむと聞かせ給ふ	×	に伊豫守なにがしの朝臣まいりてうちにかうく	の事	—	—	—	
内	×	×	×		×			それ	×	×	×
蓮	×	に	—	を	—	に	か	程	—	—	—
九	×	に	—	を	—	に	か	程	—	—	—

鎌	—	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—																							
古	な	む	さ	ふ	ら	ふ	な	と申すを聞き	×	給ふ	×	御心ちどもい	か	ば	か	り	か	は	あ	り	け	む	さ	ら	に	う	つ	の	事	と	も	お	ほ	
内	×	×	—	—	—	—	—	かせ	—	ひ	て	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
蓮	ひ	け	—	—	—	—	—	かせ	—	×	—	×	×	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
九	ひ	け	—	—	—	—	—	かせ	—	×	—	×	×	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—





九	蓮	内	古	鎌	九	蓮	内	古	鎌	九	蓮	内	古	鎌
×	×	に	×	×	—	—	—	く	—	×	×	川	×	×
×	×	あ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	わ	×	×
×	×	め	×	×	—	—	—	×	×	×	×	た	×	×
×	×	わ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	り	×	×
×	×	か	×	×	—	—	—	×	×	×	×	け	×	×
×	×	み	×	×	—	—	—	×	×	×	×	る	×	×
×	×	こ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	に	×	×
×	×	さ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	や	×	×
×	×	へ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	と	×	×
×	×	み	×	×	—	—	—	×	×	×	×	見	×	×
×	×	た	×	×	—	—	—	×	×	×	×	え	×	×
×	×	て	×	×	—	—	—	×	×	×	×	たり	×	×
×	×	ま	×	×	—	—	—	×	×	×	×	道	×	×
×	×	つ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	の	×	×
×	×	り	×	×	—	—	—	×	×	×	×	程	×	×
×	×	ぬ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	れ	×	×
×	×	る	×	×	—	—	—	×	×	×	×	い	×	×
×	×	か	×	×	—	—	—	×	×	×	×	よ	×	×
×	×	な	×	×	—	—	—	×	×	×	×	り	×	×
×	×	さ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	も	×	×
×	×	れ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	と	×	×
×	×	ど	×	×	—	—	—	×	×	×	×	を	×	×
×	×	中	×	×	—	—	—	×	×	×	×	う	×	×
×	×	將	×	×	—	—	—	×	×	×	×	お	×	×
×	×	殿	×	×	—	—	—	×	×	×	×	ぼ	×	×
×	×	の	×	×	—	—	—	×	×	×	×	さ	×	×
×	×	に	×	×	—	—	—	×	×	×	×	れ	×	×
×	×	ほ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	て	×	×
×	×	ひ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	陣	×	×
×	×	は	×	×	—	—	—	×	×	×	×	の	×	×
×	×	こ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	ほ	×	×
×	×	よ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	ど	×	×
×	×	な	×	×	—	—	—	×	×	×	×	く	×	×
×	×	く	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×
×	×	そ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×
×	×	を	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×
×	×	と	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×
×	×	り	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×
×	×	給	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×
×	×	ひ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×
×	×	た	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×
×	×	り	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×
×	×	つ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×
×	×	れ	×	×	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×

